

令和4年度 県立家島高等学校 学校評価

分野(Ⅰ 学校全体・組織・運営 Ⅱ 学習指導 Ⅲ 生徒指導 Ⅳ 進路指導 Ⅴ 地域連携・PTA)
評価(A よくてきた B できた C あまりできなかった D できなかった)

分野	分野	評価項目・達成目標	成果指標(具体的な達成目標)	評価	成果・課題	改善策	学校員評価
総務	I	年間行事の精選と生徒の主体的な参画を促し、特色ある学校づくりを努める。	行事検討委員会と連携し、学校行事の改善を充実を図り、生徒の満足度を高める。	B	新型コロナウイルス感染症拡大防止策を講じながら、流行前の規模・形式で実施できた行事が多かった。	生徒のニーズを把握し、教育活動上、より有益な学校行事の実施・改善を検討する。	
	I, V	防災避難訓練等を実施し、命を守る意志と技術を身に付け、地域に貢献できる人間の育成を目指す。	防災避難訓練を実施し、他者の生命を尊重する態度と主体的な行動力を身に付ける。	A	年2回の防災避難訓練を通じて、他者の生命を尊重する態度と主体的な行動力を身に付けることができた。	毎年同じではなく、様々な事態に備えた避難訓練を行う。	
	V	地域の関係機関をはじめ、PTA・同窓会、地域連携支援協議会等と連携し、魅力ある学校づくりを推進する。	地域と連携した活動の展開などに努めるとともに、地域行事への生徒・教職員・保護者の積極的な参加を促す。	A	小・中・高・地域合同避難訓練として、新型コロナウイルス感染症流行前の形式に近い形で実施できた。自衛隊・消防署の方と協力して様々な活動を行うことができた。	地域との連携をさらに深め、避難経路や通学路の安全確認等、活動の幅を広げる。	
	I	生徒の愛情や希望、また本校の特色が全面に出るような教育課程を設定し、生徒一人ひとりが各自の能力を十分に発揮する。	教務部で定期的に協議を行う。また、必要に応じて教育課程委員会を開く。	C	これまで蓄積された経験を活かし、多様な選択科目を設けた特色ある教育課程を実施することができた。必要に応じて教育課程委員会を開催し、意見交換を行い生徒が主人公となる充実した議論ができたが、教務部での定期的な協議が行なわれていなかった。	教育課程委員会の開催回数を現在よりも増やす。教務部会を定例で開催する。	
	I	少人数や習熟別などのきめ細かい学習指導を行い、学習内容の定着・定着を促す。	教務部で定期的に協議を行う。また、必要に応じて教育課程委員会を開く。学期ごとの成績不振科目補習者数をゼロを目指す。	C	少人数や習熟別などのきめ細かい学習指導を行った。放課後等に質問に来る生徒が増え、職員室前で学習する姿が多く見られるようになった。また、考査前日補習を行う成績不振者への対応を行ったが、成績不振科目がゼロにはならなかった。	小規模のよさを活かし、個に応じたきめ細かい教育活動を展開し、教員担当と担任の協力や教務部の定期的な協議体制を確立していく。	
教育	II	進学・就職それぞれの進路目標に応じた「確かな学力」を身に付けさせるために、精選した授業内容を見直す。	学期ごとの成績不振科目補習者数をゼロを目指す。	C	個別の特性や進路に応じた学習指導を行うことができた。考査前日補習を行い成績不振者への対応を行ったが、成績不振科目がゼロにはならなかった。	進路指導などを通して、健康管理・時間管理の重要性を認識して、家庭学習の定着や時間の確保を図る。	
	II	一人一台端末やICT機器を活用し、授業内容の充実や学習内容の効率化を図る。	公開授業や研究授業を通して指導方法について研鑽し、授業改善や指導力向上に向けて取り組む。	A	ハイブリッドによる小中高合同のICT活用研修を行った。また、ICTを活用して公開授業回数を2回実施し、研究授業を通じて教員の研修を超えて授業改善や指導力向上に向けて研鑽することができた。	一学期の取り組みをふりかえり、スキルのある一部の教員だけの取り組みにならないように注意する。	
	II, III	先生・生徒指導と連携しながら、生活習慣の定着を図り、遅刻・早退・欠席を減少させる。	遅刻・早退・欠席の数が年々減少傾向にあるようにする。	C	減少傾向にあるが、3学期は休講を避けやすく、生徒の生徒において遅刻や欠席が多い状態が見られた。	連絡指導を徹底し、保護者と協力して基本的な生活リズムの確立を図る。また、生徒指導部とも連携して生活習慣の見直しを図る。	
	II, III	進路指導と連携しながら、長期休業中の補習および模擬試験を計画的に実施する。	大学進学者は、原則参加するように促す。	B	夏季休業中に補習を行い、基礎基本の定着だけでなく発展的な内容にも取り組むことができた。模擬試験は今年度、2・3年生は実施したが、1年生は実施しなかった。	進路選択に相応しい学力の定着と進路意識の醸成に向けた進路LHRや行事の充実を図る。	
	I	いじめ認知を強化し、生活環境の正常化を図る。	年間11回の「生活実態調査」を実施するとともに、担任が協力を得て生活環境や人間関係を整える。また、教員間で生徒情報を積極的に共有する。	A	一昨年、昨年といった案件があったが、今年度は生徒同士の友人関係の問題は報告されていない。教員間で生徒情報をつきつかり把握し、年間11回の件数ゼロであった。	生徒同士のトラブルはほぼなく、落ち着いた学校生活を送っている。面談を増やし、一人ひとりとつづきつづきする機会を作る努力を怠らない。	
生徒指導	I, III	交通安全に係る規範意識を高める指導をする。	年間1回以上の「交通安全講話」を実施する。	B	交通安全を違反するような報告が何件もあった。全生徒に交通安全ルールの徹底を呼びかけた。	教員だけで呼びかけるのではなく、生徒会や呼びかけようにする。	
	I, IV	「挨拶、返事、報告、連絡、相談、お礼、お詫び」を実践する。	校内掲示物や指導標を掲示する取り組みを行い、習慣化させることを目指す。生徒の委員会活動での提示物作成。	A	校則を守るために服装点検を毎日行った。	服装違反をする生徒はほとんどいなくなった。なぜ校則が存在するのか、その校則の意義などについて話すことが大切であった。	
	I, III	地域行事やボランティア活動に積極的に参加する。	奉仕活動と地域清掃を合わせて5回以上実施し、「奉仕意識」「自己有用感」「自尊感情」「ふるさと意識」等の高揚を図り、地域を誇りリーダーシップを養成する。	A	奉仕活動を2回、清掃活動を毎学末末に行うことができた。	教員からの働きかけによって、次のステップである、生徒が主体となって予定を立てるようになる。	
	I, IV	3学年全員の進路希望を実現する。	進路未決定者0人にする。	A	就職希望者への早期指導や各生徒の実情に応じた進路指導を徹底し、10月末時点で進路未決定者0を達成した。	今年度得られた知見及び手順を来年度の進路指導に活用し、継続した進路実現を達成できるように努める。	
	I, IV	スタディサプリや模擬試験を積極的に活用して生徒の学習レベルを掌握し、生徒一人ひとりの実情に応じた進路指導を展開する。	進路行事は年間3回以上、進路相談は定期的に実施し、2年生2学期期には進路希望を決定できるようにする。	A	左記の進路行事に加え、企業と連携した県立島高等学校や人生設計のシミュレーション等、今年度新たな行事を企画・実施し、生徒の進路意識を高めた。	明確な進路希望を持っていない生徒に対しての個別の指導を行う。	
進路指導	I, IV	生徒の主体的な進路選択とその実現を目指す。長期的な視点に立った進路指導計画を確立して実行する。	生徒の主体的な進路選択とその実現を目指す。長期的な視点に立った進路指導計画を確立して実行する。	B	進路指導計画に沿った指導を進めることが出来た。	中学校から引継ぎを行ったキャリアノートの効果的な活用を検討する。	「生徒アンケートで本校に入学したかった」との割合が大幅に増加した。特に、進路指導の充実や進路指導の充実など生活習慣が変わった生徒が多く見られることが影響しているのではないかと考えられている。
	I	自身の健康に関心をもち、主体的に健康な生活を送ることができる心と体を育てる。	個々に応じた指導や学年・他部署・専門職と連携した健康指導を行い、健康意識の高揚を図る。また、健康診断や健康相談、健康講座を実施する。	B	朝の健康観察や保健室実習記録を活用し、同様の理由で来室する生徒や頻回来室者に対して、原因について一緒に考える機会を設けた。基本的な生活習慣を中心に振り返り、継続的なアプローチを続ける結果、来室を減少させることができた。	症状や必要性に応じて、保護者や担任、キャンパスカウンセラーと連携を図り、多方面からアプローチしていく。また、今後引き続き、健康問題の発見・早期治療の重要性について保健指導し、早期の医療機関受診を促していく。	「私(本校OB)の在学中は進路を迷った人はいませんでした。そういう意味では進路指導が非常に効果的だった。進路指導が伸びていることは評価できる。」
	I	学校安全に対する意識を高め、学校事故防止と緊急時対応の充実を図る。	年度初めの教務体制の周知徹底と、職員・生徒・保護者・関係機関との連携強化を図る。また、安全点検を行い、安全管理・安全教育につなげる。	A	職員・生徒を対象にした心肺蘇生法・AED講習会、職員を対象にしたエレベーター・非常時の対応講習会を実施した。また、安全点検を行い、安全管理・安全教育につなげる。	職員の研修会参加率を上げる。	
	I	学習意欲や対人関係などに困難を抱え、支援を必要としている生徒がよりよい学校生活を送ることができるよう、支援体制の充実を図る。	月に1回以上のサポート委員会やケース会議を開催し、個別の困難を抱えている生徒の支援体制を整える。また、各クラスに「支援体制」を構築し、日々の授業に活かす支援体制を行う。	B	心のサポート委員会で、特に支援を必要としている生徒について管理職、学年主任、カウンセラーと連携し、個別の困難を抱えている生徒の支援体制を整える。また、各クラスに「支援体制」を構築し、日々の授業に活かす支援体制を行う。	今後は、必要な支援の実施・評価、保護者との連携にも重点を置き、卒業後を見据えた支援に繋げていく。	「スタディサプリの効果はどうか。まだまなびたい人や内容があっても、授業の進度や生徒の学力等に合わせた活用している。学習意欲が上がるという意味で効果がある」と考えられている。
	I	図書委員長を中心に、図書委員全員で図書室を主体的に運営する。	図書委員の出ししや図書便利(BOOKMARK)の各学年1回の発行を図書委員が行う。	A	図書委員長を中心に、図書委員全員で図書室を主体的に運営することができ、図書便利が学年1回発行された。	図書委員の活動が図書室の活性化につながっているようにしたい。	
図書	I	図書室の利用を活性化させる。	図書室の利用を活性化させる。図書室の利用率を前年度より増やし、年間貸出冊数が100冊以上になるようにする。	C	全校生徒の数が減ったとはいえ、利用者444人、年間貸出冊数69冊と昨年以上の数字となった。図書室の利用を活性化したい。	昨年図書室で受検勉強していた生徒がいて、利用がルーティンワークとなっていた。そういった生徒が増えるようにしたい。	
	I	図書委員全員で書架の整理を行い、多目的に利用しやすい図書室にする。	書架の整理を完了させる。加えて読書以外にも活用できる環境を整える。(放課後のクラブ活動のミーティングなど)	A	書架の整理し、自習、ミーティング、インターネットなど様々な目的で活用できた。また、授業で使用することもあった。	図書委員を中心に利用しやすい図書室を作り上げた。	
	I	生徒の人格尊重の意識を一層高める。	人権LHRを各学年で年間を通じて2回以上実施する。	C	各学年ごとで職業差別、平等や学習の学年に合ったLHRを1～2回行うことが出来たが、学年主導での実施であった。	年度の初めに、学年ごとの人権LHRの計画を学年で相談しながら立て、実施できるかの確認を学期ごとに行う。	「素晴らしい卒業式で嬉しかった。卒業式も立派な卒業式であった。卒業式も立派な卒業式であった。卒業式も立派な卒業式であった。」
	I	生徒の秘密や人権に配慮した教育相談を着実に実施する。	学年は生徒と学期に1回以上面談し、学校全体ではキャンパスカウンセラーと連携した教育相談を月に1回以上行う。	A	面談とキャンパスカウンセリングとの教育相談を指標通り行うことが出来た。	継続して行っていく。	
	I	校内研修会を実施することで教職員の人格意識を高める。	校内で職員対象の研修会を1回以上実施する。	A	2学期に研修会を兼ねた講演会をおこなった。	次年度以降も引き続き新たな講演会等を検討する。	
1学年	I, III	挨拶・清潔さ・仲間作りを大切に。自分の立場がもたらせてくれるクラス、皆で協力し、支え合って成長できるクラスをつくる。	挨拶を元気づけながら、基本的な学校生活を確立する。クラスの中で、お互いに助け合い、理解し合い、信頼できる友人をつくる。	A	挨拶・清潔さ・仲間作りを大切にしながら、基本的な学校生活を確立する。クラスの中で、お互いに助け合い、理解し合い、信頼できる友人をつくる。	検査履歴をもとに検査を受け取らせてほしい。生徒への声掛けの工夫や配慮の徹底を密にする。	
	I, III	部活動や学校行事への積極的な参加を促し、達成感や協働性を養う。	委員会の仕事など各自の責任をしっかりと果たす。主体的に考え行動できるようにする。仲間を助け合う。	B	少人数であるため役員と一人一役が基本となっており、仲間と協力しながらその責務を果たす姿がみられたが、指示待ち傾向であることが課題である。	声掛け等を実施し、生徒がより主体的に考え行動できるようにする。	
	I, IV	将来を考え、具体的な目標を持ちそれに向けて努力する力を養成する。	キャリアノートを活用し自己理解を深める。進路学習を通して将来就きたい職業への理解を深める。具体的な進路のイメージを持って、2年連続時の進路選択を行う。	B	キャリアノートを活用して進路学習を進めることができた。進路選択や進路学習を通して将来就きたい職業への理解を深められた。コロナウイルス感染症拡大のため職業体験やオープンキャンパスが中止となったケースが多。体験活動が当初の予定より少なかった。	外部講師や外部での見学者、体験に力を入れた学習を取り入れていきたい。	
	II	学習意欲の確立を図り、基礎学力を身に付ける。	「朝の学習活動」を通じて、思考力・判断力・表現力を育み、自分の考えや意見を積極的に発表できるようにする。主体的に考え行動できるようにする。集中して授業に取り組める環境をつくる。	B	「朝の学習活動」を通じて基礎学力の定着に重点を置いた指導を行い、成果を上げた。授業で活発に意見を出し合ったり意見交換したりする活動重視し、主体的に学ぶ姿勢がみられるようになった。思考力・判断力を養う取り組みが少なくなってしまった。	思考力・判断力・表現力を養うため新聞や本などの読書に励ませ、自分の考えをまとめて発表する活動や協働的な学習プログラムを行う。	
	I, III	「凡事徹底」を目標に基本的な生活習慣を定着させる。クラスの「員としての役割を果たす」とともに、他者の気持ちを考え、自分が今すべきことと考えて行動できるようにする。	定期的な振り返り活動を取り入れ、自身の生活習慣やクラスにおける役割を確認させる。	B	自身に割り当てられた仕事だけでなく、教員や周りの生徒が困った際に手を差し伸べられるような生活が定着した。自身の生活習慣が確立できている。さらに、2年生の進路決定から後援会(進路指導委員会)と連携し、進路実現に向けて目標の学校生活をより一層確かなるよう意識が高まっている。	家庭との連携を強化して遅刻・欠席を減らす。また、最終学年としての目標を持つ。卒業までに自分で行って行動できるように学校生活を定着させた。	
2学年	I	基礎学力・基礎的な学習意欲を身に付ける。	スタディサプリの課題配信を日常的に行い、学習意欲を身に付ける。	B	毎週配信しているスタディサプリの課題に加え、長期休業中の課題や考査の復習の指導を継続し、この取り組みは上がった。家庭で何らかの学習に取り組むことが当たり前になっている。しかし依然として、一部の生徒は課題の取り組み方が甘く、基礎学力・学習意欲が身に付いていない。	最終学年となる自覚を持たせ、授業や課題の取り組み方を改めて考えさせたい。それにより、確かな基礎学力の向上へと結び付けたい。	
	IV	卒業後の進路を明確にイメージし、目標を具体的に定める。	自分が将来どのように社会参加していくのかを考え、そのための進路を目指すことができると具体的に考えさせる。	A	横断の実施や進路イベントへの参加、進路LHR等を充実させたことで、進路・就職希望者ともに進路実現に向けた具体的な計画を立てられている。さらに、2年生の進路決定から後援会(進路指導委員会)と連携し、進路実現に向けて目標の学校生活をより一層確かなるよう意識が高まっている。	来年度の1年間の計画を作成させ、受検までの進路を明確にさせるとともに、卒業までに自分で行って成長させていく考えさせたい。	
	I, III	自主性・積極性・責任感を感じ、各々が考えて自ら行動できる学年にする。	学年目標達成するためのルールを設定し、3年生以降は生徒が自ら目標設定を行い、さらによいクラス形成ができるようにする。	A	3年生という学年もあり、学校を引っ張っていくという発言や行動がみられる。そのため自ら考え行動できるような集団になった。	上級生として、下級生にある程度の見本が見せられたのではないかと感じる。生徒同士で注意しあえる雰囲気や上級生であるという自覚を持たせた結果である。	
	IV	全員が希望の進路先に到達できる。	進路指導部と連携しながら、計画的な進路実現に向けた行動をとらせる。	A	国立大学1名、私立大学4名、専門学校8名、就職7名であった。ほとんどの生徒が第一希望の進路決定することができた。	しっかりと、生徒一人ひとりと面談をし、早い段階から進路先に向けての準備と連携があった。	